

象万羅森

京都府内で
開催された
「容器包装
R連携市民セ
ミナー」。R
推進の必要
性や阻害要因
について熱心

な意見交換が行われた。その中に「環境に配慮した生活を求める市民はRを促進したという実感を求めている」との指摘があった▼分別する側からみると、「なぜその方法なのか」という理由がわかりづらいと、効果への疑問がわき、モチベーションも上がらない。リサイクルの最終結果が明確であるのに越したことはない▼リサイクル品を使う側からみると、また違った面もある。食品残さを利用した飼料で育てた豚の肉を販売する業者は消費者に廃棄物由来だといわない。商品のイメージダウンを心配するからだが、リサイクルの事実を隠されてしまう▼石川県立大学の高月紘教授は「持続可能な社会が（私たちの）目指すべき方向で、循環システムはそのための手段」と語っている。こうした社会を構築するには多くの課題があるが、環境問題への関心は今までになく高まっている。市民だけでなく、製造メーカーや行政、処理業者が手を取り合い、問題に対処すべきだ。

(慎)

平成21年3月23日
週刊循環経済新聞